

カタクチイワシ瀬戸内海系群研究機関会議 議事概要

日時：令和4年8月18日（木） 9時30分～12時00分

場所：ホテルチューリッヒ東方2001 及び Microsoft Teams を用いたリモート形式

参加者：資源評価参画機関（以下、参画機関）、外部有識者（富山毅准教授）、水産研究・教育機構（以下、機構）

<管理基準値案等に関する議論>

外部有識者：目標管理基準値案は $\beta = 1$ として求めているが、将来予測では $\beta = 0.8$ とした漁獲管理規則案を推奨しており、何を目標とするのか分かりにくい印象を持った。

機構：目標管理基準値はMSYを実現する親魚量であるため、 $\beta^* = 1$ (Fmsy)により求めている。その上で、将来予測については、様々な β で漁獲した場合の予測結果を示している。このように、目標を求める過程と将来予測を行う過程の2つの過程が存在する中で、将来予測においては $\beta = 0.8$ とした漁獲管理規則案を推奨している。

*漁獲管理規則においては、漁獲圧を調整する係数

外部有識者：本資源は1歳で成熟するが、2歳魚はほとんど存在しないため、毎年、親魚が入れ替わるような資源であり、年変動が大きくなる可能性がある。そのため、本資源は変動性が高く、将来予測における不確実性も高いことについては、漁業者の方などにも、しっかりと説明すべきである。

外部有識者：カタクチイワシの他系群やマイワシについては、自然死亡係数(M)が急激に高くなることにより資源が崩壊したと考えられる例があり、本系群についても、いつかそのような日が来ることを懸念している。その上で、本系群についてはMを一定とした将来予測を行っているが、ステークホルダーに示す際には、Mが変化する可能性なども含めて提示すべきである。

機構：資源評価においては、加入後のMについては一定としているが、年変動を引き起こす加入前のMについては、確かに年変動が激しいと考えられる。そのため、今回の本系群の資源評価においては、Mの年変動が激しいと考えられるシラスを除いたものとした。また、カタクチイワシ太平洋系群については、レジームシフトを考慮することにより、加入前のMの大きな変動を考慮しているが、瀬戸内海系群については、レジームシフトが生じているという知見がないため、レジームシフトは考慮していない。一方、加入後のMについては重要な検討事項であるため、他の資源も含めて、機構全体として検討していく予定である。

参画機関：今回の将来予測結果は、かなり楽観的な予測結果となっているが、チューニングを導

入ることにより、2021年の親魚量が高く推定されたことによるものと理解している。その上で、親魚量の不確実性が高いことについては、しっかりと説明すべきである。

参画機関：0歳魚の平均漁獲量が最大となる親魚量については、目標管理基準値案よりも低い値となっており、経済的な側面も考慮すると、そのような親魚量を目標とすべきといった指摘も出てくる可能性がある。その上で、可能であれば、漁獲金額を基準とするような対応の準備をしてほしい。

機構：今後、ステークホルダー会合などにおいて、そのような要望を受けた場合には可能な限り対応していきたいが、そのような検討に必要な情報を機構としては有していないため、情報の提供についてのご協力をお願いする。

参画機関：現状だと神戸プロットの緑色の領域に入っており、資源として余裕がある状況と考えられるが、今後、資源が厳しい状態になった際には、シラスを管理しないことについては意見が出てくると考えられる。その上で、将来的には、シラスの漁獲を抑えた場合の将来予測は可能なのか。

機構：現時点では、シラスを0歳魚にまとめる形での資源量推定および将来予測となってしまうため、難しい状況にある。

参画機関：本系群はシラスの漁獲量が多い。難しいとは思いますが、シラスの管理に向けた検討の準備をお願いしたい。

機構：シラスについては、ステークホルダー会合などでも指摘されると考えられるため、いただいた指摘を踏まえた上で可能な限り対応してまいりたい。

<外部有識者講評>

カタクチイワシについては、変動要素の多い資源であることから、管理目標を定めた上でも、現場の方々は説明などに大変な思いをされると考えられるが、本資源が有効に利用され、持続的に漁獲されるような資源になることを願っている。

以上